

当学科における病院実習の意義と問題点

学院 義肢装具学科 丸山貴之、高嶋孝倫、根岸和論、有菌裕樹、星野元訓、中村喜彦

【はじめに】

現在、義肢装具士の養成教育は、3年制の専修学校に加え4年制の大学でも行われている。しかし、義肢装具の専門領域の教育内容は、多少の差異こそあれ各校で大きな違いはなく、義肢装具に関する知識と理論および基本的な製作・適合技術を中心としたカリキュラムを実施している。その中で重要となる臨床での実践的な教育は卒前の2ヵ年で行う各6～8週間(当学科においては6週間 225時間)の臨床実習がそれにあたる。義肢装具士の養成という意味では、これらの臨床教育で十分とは言い難いが、カリキュラムの時間上の制約、受け入れ施設側の制約などにより、現在の状況となっている。

そこで、より実践的な臨床での教育を拡充するために、当学科では平成17年度より病院の補装具クリニックに、今年度よりフットケア専門外来に協力を仰ぎ病院実習を実施している。

これは、当学科が総合リハセンターに併設され、教官は病院に併任しているという環境を活かした、他養成校には見られない特色の一つであり、学院と病院、研究所補装具製作部との横断的な取り組みにより、教育を充実させる試みとなっている。

【病院実習の内容】

病院実習では、当センター病院の患者を中心とした、医師・義肢装具士・他医療関連職からなるチーム医療、その中での義肢装具士としての役割と責任、患者や他スタッフとのコミュニケーションの重要性、各症例の疾患や患者の状況と義肢装具の適応、給付の仕組みなどについて臨床の現場から学び、義肢装具に対する理解を深めることを目的としている。

具体的には、カリキュラムとして45時間を設定し、実際に義肢装具が処方される過程、適合および納品、そしてその義肢装具を患者が使用している状況といった一連の流れを「見学」し、そこでの議論の内容、製作された義肢装具、疾患等についてレポートにまとめ「ディスカッション」を行う。この「見学」と「ディスカッション」により、平素の授業で学ぶ義肢装具の知識や基本的な技術をより実践的なものへ深めている。実際の臨床現場から得られる知識は非常に重要であり、この病院実習により臨床での教育がより充実したものとなっている。

また、近年糖尿病や重症虚血肢を中心とした足病変に対するフットケア・下肢救済の考えが急速に広まっている。今年度より行っているフットケア専門外来での病院実習においては、特殊ではあるが近年重要度を増した疾病に接する機会を与えられている。

なお、病院での実習であることから、個人情報の取り扱いには細心の注意を払っている。

【病院実習の問題点】

病院実習では、未資格者である学生は議論への参加や製作の担当はすることはなく、「見学」が主となり、回数も限られる。対して、諸外国では6ヶ月～1年の長期の臨床実習を実施し、実際に患者を担当し義肢装具の製作・適合を行うような実習を実施している例もある。同様の内容は時間的、法制度的に難しいが、限定された条件の中で教育の効果をあげるための更なる工夫が継続して必要と考える。